24　ロシア帝国軍医・関余作のロシア通信

大西泰久

幕末から明治初期にかけて活躍し、蘭方医として名の知られた関寛斎の三男、関余作は明治三十七年（一九〇四）に岡山医学専門学校（現岡山大医学部）を卒業した。

その時三十歳に達していた。中山沃氏（岡山大学名誉教授）によれば、明治二十五年七月には第三高等中学校医学部に在籍していたというから、途中休学していたものと考えられる。

同氏によると、明治二十五年七月二日徳島を襲った豪雨と津波のため、甚大な被害を受けた父関寛斎の医業を手伝わなければならなかったためではないか、ということである。

岡山医専を卒業した関余作は、翌年明治三十八年五月、札幌区立病院の外科医として勤務したが、その翌年には病院を退職、明治三十九年十二月満州へ出立した。

明治四十年一月十一日の夕方、大連に到着、十四日に旅順、二月九日には吉林へ入り、四月十八日には長春、そして十二日にはハルビンへ行った。

鈴木要吾『関寛斎』（昭和十一年）の年譜には、ハルビンからモスクワに至り、ここで露国皇帝の医となると記されているが、果してそうか、今のところこの確証はない。

また〈※（明治四十年）八月二十七日余作帰省す〉（※筆者注）とあるが、八月八日付でハルビン日本人会の住所で、余作が札幌の友人に宛てた葉書には、これからまた前進するから当分音信を欠くと書いているのをみると、八月二十七日帰省が事実とすれば、急に何かあったためか、体の具合が悪くなったためか、何れにせよ、帰省したという月日と、友人に宛てた便りの月日の差が近いように思う。

関余作が再度日本を離れる大正四年までは日本にいたのは間違いない。多分札幌・陸別を主に生活の根拠としていただろう。

関余作が大正三年には、まだ日本を離れていないのは事実で、徳富蘆花の日記（大正三年五月～六月）には余作が蘆花を訪ねて来たことが記されている。

大正三年（一九一四）第一次世界大戦が始まり、ドイツはロシア、フランスに宣戦、そして各国がドイツ、オーストリアに宣戦した。

その翌年、関余作はロシア陸軍義勇軍の軍医に応じたらしい。大正四年七月十七日付のウラジオストクから出した葉書には、〈従軍ノ件、先日漸ク公式ノ手続相済候へ共……〉と書いていることから、彼が義勇軍募集のことを知って、再度ロシアへ渡ったのは大正四年のはじめころではないかと推察するのである。

また十月二十七日スモレンクスからの便りでは〈昨日ヨリ医務ニ従軍ノ身ニ相成申候……〉と書いている。

このように、関余作はロシア陸軍の軍医として各地を移動して行く。ウラジオストク、スモレンスク、ペトログラード、ドウインスク、キーエフ、ウエルバ、ヤスイなど。

その間、各地の事情を友人に書き送った。

やがてロシア革命が起こり、ロシア帝国は崩壊する。大正七年（一九一八）ロシアはドイツと講和を結び、戦争は終結する。

関余作は除隊し、シベリアに向かう。ルーマニアからオデッサに行き、解散する予定である。ルーマニアからイルクーツクに到着するまで、革命のさなかの苦労を重ねながら、その時のロシア人たちの様子、医療事情、生活などを冷静に見て書き送っている。

第一次大戦、ロシア革命前後の状況を、異色のひとりの日本人医師の目を通して知らさせた内容は、現在どのようにみることが出来るのか。当時の状況を、日本人医師の見聞をもとに託されたものは資料としても興味深いと思う。

（北海道武蔵女子短期大学）